

# 貫之の都落ちと文学

一日記文学開始の裏

鄭 順 粉\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 都落ちと左遷意識
  3. 土佐への不満と孤独
  4. 都への思慕と挫折
  5. 道真の都落ちと文学
  6. おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

古代日本は、官人が文学を営むことが多かった。文章経国思想によって官人には、詩文や和歌などの創作が必須の教養として要求されたためである。当時の知識階層を成した官人は、当然文学形成や発展に深く関わっていたのであるが、各々の文学世界は政治の波に大きく左右されるものであった。国家の最高権力者の地位にまで昇りつめた人も、一日にして失脚し、僻地に追放される身になったりする。そのような政治的な位置の変化は、自ずと文学の営為に多大な影響を及ぼす<sup>1)</sup>。環境的な変化は、内面的・精神的な変化を経験する契機を提供し、都を離れ遠く地方に下る身になってはじめて文人は、まったく新しい人生の局面に立ち向かうようになるのである。その意味で、不本意な都離れは、文学者にとって必ずしも不運なことではなかった。都を離れて地方で暮す孤独な生活は、文学者とし

---

\* 培材大学校 日本学科 副教授 日本古典文学

1) 代表的な人物が菅原道真と紀貫之である。

ての感性を育ませ、内面的な感情をより深化する契機となるのである。また、地方の自然も、類型化・形式化した都のそれとは違って、文学者の心に感興を呼び起こす斬新さを帯びていたはずである。

平安時代の日記文学の嚆矢『土佐日記』も、紀貫之の都落ちから生まれた作品として見られる。それは、都から遙か遠い土佐国の守として四年間を過した貫之の新しい創作であった。漢詩に対する和歌の効用性を打ち出すことに注力した貫之は、土佐の生活を経て、仮名散文による新しいジャンルを開いたのである。『土佐日記』は、貫之の土佐守としての赴任がなかったら、当然生まれることはなかったであろう。その新しい世界の創作は、都落ちという初めての経験によってこそ可能だったと考えられる<sup>2)</sup>。

本稿では、貫之の都落ちと文学の関係について考察し、『土佐日記』という日記文学開始の裏を明らかにしてみたいと思う。

## 2. 都落ちと左遷意識

貞観十(868)年ごろ生まれた紀貫之は、『是貞親王家歌合』『寛平御時后宮歌合』などの歌合や、『新撰万葉集』にはじめて歌人としての名を現した。その後、貫之はその理知的な歌風が宇多天皇以来盛んになった和歌復興の気運に乗ってしだいに実力を認められるようになり、延喜五(905)年には醍醐天皇の勅命による『古今和歌集』編纂にかかわるなど、しだいに歌壇の中心的な歌人になっていく<sup>3)</sup>。

しかし、歌人としての名声は高まっても、官位は相変わらず低く、内膳・典膳・少内記・大内記などを歴任して、従五位下に序せられるのは延喜十七(917)年の五十歳ごろである。それから、大蔵省・内蔵寮などの出納に立ち会う大監物や、右京中の司法警察、庶政を掌る右京亮などを経て、土佐守に任ぜられたのは、延長八(930)年のことで、すでに六十歳を越えていた。

しかも、この土佐守赴任は、紀貫之にとって都を離れる最初のことであった。延喜六(906)年二月任の越前権少掾<sup>4)</sup>や、同十七(918)年正月任の加賀介、同十八年二月任の美濃介<sup>5)</sup>など、地方

2) 『土佐日記』に関する研究の中で、仮名日記の嚆矢である側面から行われる場合は、従来女性仮託の理由や背景を明らかにするものが多かったが、本稿では、都落ちという負の側面から『土佐日記』の創作の問題を考え、日記文学開始の裏に潜められている貫之の意図というものを探してみる。

3) 貫之については、菊地靖彦『『古今集』以後における貫之』(桜楓社 1980)、村瀬敏夫『紀貫之の研究』(桜楓社 1981)、長谷川政春『紀貫之論』(有精堂 1984)、藤岡忠美『紀貫之(王朝の歌人)』(集英社 1985)、村瀬敏夫『宮廷歌人 紀貫之(日本の作家)』(新典社 1987)などに詳しい。

4) この越前権少掾は、御書所預として『古今集』の撰進に関わっている時期のことであったから、任地に赴任せず俸給を加算するための遷任の官であった。

5) 貫之は、大内記から叙爵してこの加賀介に任じられたが、それを不満として赴任せず美濃介への遷任運動をして

官(外官)として三度任命されているが、それはすべて現地に赴任しない遥任国司だったのである。延長八(930)年、一月二十九日の土佐守任命及び八月ごろの赴任は、貫之にとって最初の都からの離れになり、老年にして当時海賊の横行する海を渡って土佐国に赴任するのは、かなりの心の負担になったはずである。

土佐国は、『万葉集』に「天さかる夷」「遠き土佐路」と歌われ、『懐風藻』の詩人でもある石上乙麻呂は「南荒」あるいは「南裔」と呼んだ所である。古来大和の都からも山城の京からも「遠流の国」であった。古代の歴史書に現れる土佐は台風と地震の国であると同時に南海僻遠の行路險難の地としてである。都からの官道は、「行程迂遠、山谷險峻、駢路迴遠」の故をもって、それまでの伊予回りが養老二(718)年阿波南海岸回りに変更になり、さらに延暦十六(797)年北山越えと変わるのである。しかし四国山脈の峻険は依然としてその行路を妨げた。運脚の上国下国の行程を四国の他の三国と比較すると次のようである。

|     |    |                     |
|-----|----|---------------------|
| 阿波国 | 行程 | 上九日。 下五日。 海路十一日     |
| 讃岐国 | 行程 | 上十二日。 下六日。 海路十二日    |
| 伊予国 | 行程 | 上十六日。 下八日。 海路十四日    |
| 土佐国 | 行程 | 上三十五日。 下十八日。 海路二十五日 |

(『延喜式』 「主計上」)<sup>6)</sup>

土佐国は、阿波国や讃岐国の約三倍、伊予国に比べてもほぼ倍以上を要している。土佐国への海路の状況は、国内航路の中で最も困難で危険なコースとされていたのである。二百キロの土佐の海岸線とその後方に聳える二千メートル級の四国山脈の壁は南西から襲って来る台風と荒波をまともに受け止める。その海岸線は単調で、特に高知以東阿波との境の甲浦までは、湾一つ島一つない。その最大の難所は昔から室戸岬になっていた<sup>7)</sup>。

その土佐国は、伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐などとともに遠流の流刑地であって(『延喜式』 刑部省の条)、土佐国に流謫された人としては、天武朝の政変の中で流罪された屋垣王(『日本書紀』 卷二十九)、奈良朝に不倫関係発覚によって流された石上乙麻呂(『万

いた。『貫之集』 778番歌には、「かうぶり賜はりて、加賀介になりて、美濃介にうつらんと申すあひげに、内裏の仰せにて歌よませたまう奥に書きける 降る雪や花と咲きてはたのめけんなどかわが身のなりがてにする」と、その事情が表わされている。その直訴が奏功して、貫之は延喜十八年二月二十九日の除目で念願の美濃介になった。美濃介の任期は三年間であったが、この時は京に近かったため上京することもあったようである。

6) 黒坂勝美編輯『新訂増補国史大系26 延喜式』(吉川弘文館 1937)による。

7) 『土佐日記』の地理については、竹村義一『土佐日記の地理的研究—土佐国篇』(笠間書院 1977)に詳しい。

葉集』巻六の1019～1023)などがあげられる。また、貫之と同族の紀夏井が土佐国に流謫される事件もあった。夏井は、善政を施し、多様な才能を持つ能吏として中央朝廷においても徐々にその名を浸透させていったが、貞観八(866)年に応天門の変が起こると、異母弟の紀豊城が首謀者の一人として逮捕される。夏井もこれに連座し、藤原氏により官職を解かれて土佐国に配流となったのである。この夏井の配流は、武内宿禰以来の名家である紀氏の政界における没落を決定的なものとし、以後、同氏は宗教界や歌壇において活躍する氏族となっていった。

貫之の土佐赴任は、流人としての左遷ではなかったとしても、藤原氏の勢力によって中央から追い出される紀氏の同族意識があったに違いない。貫之は、飛鳥一奈良一平安初期まで多くの人材を出した名門家である紀氏の末裔として、矜持と自負を抱き、都人として約六十年の歳月を送ってきた。それが一日にして変わり、流刑地の土佐国へ下ることになったのである。結局、土佐国在住は、貫之にとって敗北感や挫折感をもたらした孤独の時間だったことが明らかになるのである。

### 3. 土佐への不満と孤独

『土佐日記』は、貫之の土佐守赴任を基盤にして書かれたものであるものの、内容が土佐国そのものを直接的に描いたものではない。むしろ『土佐日記』には、土佐の話が極力避けられているような印象まである。貫之が土佐の国府でどのような日常を過していたか、具体的には表わされていない。

貫之の勤めた土佐守の職掌は、次のようなものだった。

守一人。掌。祠社。戸口簿帳。字養百姓。勸課農桑。糺察所部。貢奉。孝義。田宅。良賤。訴訟。租調。食廩。徭役。兵士。器杖。鼓吹。郵駅。伝馬。烽候。城牧。過所。公私馬牛。闕遺雜物。及寺。僧尼名籍事。余守准此  
(『養老律令』「職員令」「大國条」)<sup>8)</sup>

国司の職掌は、一国だけの内とはいえ、神祇官・太政官の役までを担当する、強大で広範なものであった。そして、その国司の責任は、すべて守に収斂する仕組みになっていた。平安初期国司としての地方政治のあり方が、当時の律令政治の運営にとって極めて重要な意味をもっていたことが窺われる。また、国史の薨卒伝の治績や言動として、第一に国司の経歴を記すこともそのためである<sup>9)</sup>。

8) 黑板勝美編輯『新訂増補国史大系22 令義解』(吉川弘文館 1939)による。

『土佐日記』の中で、貫之もそれを意識してか、それとなく自分の清廉さや厚い人望を仄めかしたりする。土佐国を発って間もない承平五(936)年正月元日の状況として次のように述べられる。

元日。なほ同じ泊りなり。

白散をある者、夜の間とて、船屋形にざしはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。芋茎、荒布も、歯固めもなし。かうやうの物なき国なり。求めしもおかず。ただ押鮎の口をのみぞ吸ふ。この吸ふ人々の口を、押鮎、もし思ふやうあらむや。

「今日のみやこのみぞ思ひやらるる」「小家の門のしりくべ繩の鯰の頭、柀ら、いかにぞ」とぞいひあへなる。  
(承平五年 一月 一日)<sup>10)</sup>

都と「物なき国」の船中が対比され、正月用品の不如意から都恋しの思いがつの形になっている。都では、お正月になると、乾かした里芋の茎や海草の一種である荒布を食べ、寿命を延ばすために大根・瓜・押鮎・煮塩鮎・猪の肉・鹿の肉を食べる。それに比べて、船の中では何もなく仕方なく土佐名産の押鮎の口だけをしゃぶる。その押鮎が都の庶民の家ごとの風景を浮かばせ、鯰の頭などを恋しく思わせるが、この場合、その船中の不自由さの理由として、主人の「求めしもおか」ざる性癖が挙げられる。すなわち、当時の国司が如何に不正で私財を蓄積したかに対する貫之の意識とともに、貫之の清廉さがそれとなく書き表わされているのである。

しかし、土佐国そのものが、主題になることはなかった。土佐から帰京する船の中で少しづつ思い起こされ、触れられるのみである。また、土佐は都と対比され、不満の対象として描かれる場合が多い。後任の島田公鑿の着任の遅れや傲慢な態度、また現地の人や船頭の不遜な態度などが述べられる<sup>11)</sup>。

貫之は、延長八(930)年一月土佐守に任ぜられ、後任の島田公鑿は承平四(934)年四月二十九日の任命であるから、貫之が土佐にいた期間は満四年を越える。すなわち、島田公鑿は、四月二十九日に土佐守に任ぜられながら、貫之の帰京の旅の出発が年末になるほど遅れて着任したのである。そのような後任者の態度に対する貫之の不満は、『土佐日記』の随所において看取される。冒頭部分において、新任の守との別れの場面

9) 貫之の職務については、例えば、新井栄蔵「王朝官人紀貫之の職務」(『文学』1986 2)などに述べられている。

10) 『土佐日記』の本文引用は、菊地靖彦校注『土佐日記 蜻蛉日記』(新編日本古典文学全集 小学館1995)による。

11) このような貫之の土佐に対する不満は、文化的断絶とも深く関わっていたであろう。『土佐日記』の十二月二十四日の条には、「ありとある上、下、童まで酔ひ痴れて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」とあり、和歌的教養の皆無な人に対する痛烈な皮肉が込められている。貫之にとって土佐赴任は、そのような文化的断絶に耐えた四年間だったのである。

が次のように描かれる。

二十五日。守の館より、呼びに文持て来たなり。呼ばれて至りて、日一日、夜一夜、とかく遊ぶやうにて、明けにけり。

二十六日。なほ守の館にて饗応しものしりて、郎等までに物かづけたり。漢詩声あげていひけり。和歌、主も客人も、こと人もいひあへりけり。漢詩は、これにえ書かず。和歌、主の守のよめりける、

みよこ出でて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬるかな  
となむありければ、帰る前の守のよめりける、

しろたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなくに  
こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。

とかくいひて、前の守、今のも、もろともに降りて、今の主も、前のも、手取り交して、酔ひ言にこころよげなる言して、出で入りにけり。 (承平四年 十二月 二十四日)<sup>12)</sup>

講師は自分で餞別をしに出向いてくれたのに、新任の守は使いをよこして館に呼びつけたという貫之の不満の意を表わしている。また、都を出て遙々とやって来た甲斐もなく別れてしまうと惜しみ深く見せかける新任の守の和歌に対して、貫之は都を遠く離れた気候の荒い土佐で、つらい国司の任務を四年間果たさなければならないのは、他ならぬあなたですね、と同情を装って皮肉を言っている。酔いにまぎらせて、相手の耳に快く響くような祝福の言葉を述べて別れたのであって、二人とも本心でないことを皮肉に言っている。新任者の態度に好感を持っていない貫之の様子が窺われる。

土佐を離れて沖に出た後は、貫之の不満の対象は新任者や土地の人から船頭が変わる<sup>13)</sup>。

四日。楫取り、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」といひて、船出ださずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風立たず。この楫取りは、日めえはからぬかたのみなりけり。

(承平五年 二月 四日)<sup>14)</sup>

天気のことば船頭に任せるほかはなく、物欲を丸出しにしたり、粗野な言動があっても我慢してきたのである。しかし、その天気予測さえも当てにならないとなると、黙ってはいられない。都に近い和泉国まで帰ってきて、まだ無駄な日を費やしているという貫之の苛立ちが船頭への不満として表出された

12) 前掲書。

13) 船頭については、高野晴代「土左日記における舵取りの造型について」(『解釈』1983 11)の中に詳しく述べられている。

14) 前掲書。

ものと見られる。また、次のような叙述も見られる。

かくいひて、ながめつつ来るあひだに、ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、後へ退きて、ほとほとしくちはめつべし。楫取りのいはく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、いまめくものか。さて、「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく、奉れれども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風波のあやふければ、楫取りまたいはく、「幣には御心のいかねば、御船も行かぬなり。なほ、うれしと思ひ給ふべき物奉り給べ」といふ。また、いふに従ひて、いかがはせむとて、「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな  
いたく、「住江」「忘れ草」「岸の姫松」などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取りの心は神の御心なりけり。

(承平五年 二月 五日)<sup>15)</sup>

船が住吉のあたりに来た時、突然風が吹き出し、漕いでも漕いでも後戻りして船が転覆しそうになる。船頭の言うままに住吉の神に、大切な一つしかない鏡を奉納して海に投げ込み海は静かになる。物欲しげな態度を示し続けるのは船頭ばかりでなく、神様までが欲ばりとは、なんと当世風なことか、と嘆いている。

ところで、貫之の心情は、『土佐日記』の中に強く表出されるわけではない。第一、土佐の生活における不如意さや挫折が、和歌として詠出されることはなかったのである。和歌詠みを本領とする貫之には、異常なことである。土佐国において抱いた様々な心情については沈黙を貫く。『土佐日記』に、そのような貫之の寂しい気持が間接的に表出されたところがあるのみである。貫之の潜めた心境を反映している部分としては、承平五(936)年一月十七日の条があげられる。貫之は、海上の月と唐の詩人賈島の詩句「棹穿波底月、船圧水中天」(詩人玉屑 十五)に触発されて和歌を二首詠んでいる。

十七日。曇れる雲なくなりて、暁月夜いともおもしろければ、船を出だして漕ぎゆく。  
このあひだに、雲の上も、海の底も、同じごとくになむありける。むべも、昔の男は、「棹穿つ波の上の月を。舟は圧ふ海の中の空を」とはいひけむ。聞き戯れに聞けるなり。また、ある人のよめる歌、

水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし  
これを聞きて、ある人のまたよめる、  
かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき

(承平五年 一月 十七日)<sup>16)</sup>

15) 前掲書。

一首目の歌は、賈島の詩の前の句をもとにして月には桂が生えているという中国の故事を詠み込んだ句題和歌である。さらに、二首目の和歌は、賈島の詩を踏まえながら、さらなる広がりを見せている。海に投影された空に揺れる船を、大きな世界の中の小さな自分と対比して詠んでいるのである。大自然と対比して自己の存在のはかなさを言うのは、貫之歌の常套的な詠法でもあるが、ここでは自分の力ではどうしようもない憂情の表出として見られる。一生官職には恵まれず、貴族として最低の従五位下で、それも五十歳前後になってからやっとなれたことや、老年になって流刑地である土佐に遥々と赴任してきたことなど、いろいろな心の苦痛や悲嘆があったのである。「われぞわびしき」という言葉は、この世の中での自分の存在の矮小さを示すものとして、貫之の内省的な憂鬱が集約されて表わされたものとして注目される<sup>17)</sup>。

この虚しさは、喪失感とも関わっている。貫之にとって土佐は、個人的には女兒を亡くした所である。また、土佐滞在中にそれまで人生の支えとなっていた大切な人物を次々に失う、という憂き目に会っている。宇多、醍醐両帝、兼輔は、『新撰和歌』の勅旨をもたらした人物であったが、彼らも又他界し、貫之は失意の中で和歌編纂に取り組まねばならなかったのである。土佐において貫之は、都との断絶感や孤立感とともに、愛娘や庇護者達を失った喪失感を強めたものと考えられる。

#### 4. 都への思慕と挫折

貫之の都への思いは、船の中で年中行事と関わっている場合が多い。一月七日の条には、次のように述べられる。

七日になりぬ。同じ港にあり。

今日は、白馬を思へどかひなし。ただ、波の白きのみぞ見ゆる。

(承平五年 一月 七日)<sup>18)</sup>

正月七日は、都においては白馬の節会で、この日行われる叙位に昇叙を期待していた貫之が、後任の着任が遅れたためにこんな所で足を止められていることに不満を感じていることが推し量れる。貫之は、帰京していれば節会に列席していたはずなのに、今日の前にあるのは白馬ならぬ白い波頭だけであると言う。ここには、都でなく船中であることが強調さ

16) 前掲書。

17) この「わびし」という言葉は、作中の歌では唯一な例である。

18) 前掲書。

れ、都への帰りが遅れたことへの貫之の苛立ちが感じ取られる。

都に関する記述は数日置きであったのに対し、二月に入ると都に対する思いは募り、それが増すごとに、都の記述も増える。二月五日の条には次のように述べられる。

「今日、波な立ちそ」と、人々ひねもすに祈るしありて、風波立たず。今し、かもめ群  
れみて、ふところあり。京の近づく喜びのあまりに、ある童のよめる歌、

祈り来る風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらむ  
といひて行くあひだに、石津といふところの松原おもしろくて、浜辺遠し。

(承平五年 二月 五日)<sup>19)</sup>

今の大阪府堺市浜寺のところで、石津川の河口付近に着いた時のことである。ここでは、「かもめ」を「波」に見立てるような幼稚な趣向を詠むことも、京に近づく喜びのあまりの振る舞いとしてならば認められる、という気持である。ここに来ては貫之の心奥にも余裕が出来たことを示している。淀川を遡上する途中、渚の院を通過する際は、次のような記述になっている。

かくて、船曳き上るに、渚の院といふところを見つつ行く。その院、昔を思ひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたるところなり」「故惟喬の親王の御供に、故在原の業平の中將の、

世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし  
といふ歌よめるところなりけり」。

今、今日ある人、ところに似たる歌よめり。

(承平五年 二月 九日)<sup>20)</sup>

ここで「渚の院」とは、文徳天皇の離宮で、後に第一皇子惟喬親王の領となった所である。軽薄な人情に飽きていた貫之は、親王と業平の話に無量の感慨を催している。貫之は紀氏にまつわるこの話を感激を込めて『土佐日記』の一月八日にも「業平の君の、『山の端逃げて入れずもあらなむ』といふ歌なむ思ほゆる。もし、海辺にてよましかば、『波立ちさへて入れずもあらなむ』とも、よみてましや」と述べている。これは、『古今集』雑(886)にも収められている業平の「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」の下句を引用して、山ではなく海である場合を想定している。貫之は業平

19) 前掲書。

20) 前掲書。

を単に歌人としてのみならず、不遇な惟喬親王に対する態度などから、藤原氏の横暴に反抗する人としても尊敬の念を抱いていたように考えられる<sup>21)</sup>。京に近づくにつれて、貫之は喜びだけではなく、複雑な心境になることが読み取られる。

そのような何となく憂鬱な貫之の心境は、都の家に着いてより確実なものになった。土佐から俣びつづいた家の姿は、どこにもない。貫之は、二月十六日、ついに都の家に到着した時の感懐を次のように述べている。

家に到りて、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり。さるは、たよりごとに物も絶えず得させたり。今宵、「かかること」と、声高にももいはせず。いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

(中略)

思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、なほ、悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ  
とぞいへる。なほ、飽かずやあらむ、また、かくなむ、  
見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや

(承平五年 二月 十六日)<sup>22)</sup>

帰京の喜びはこうした邸の荒廃を目の当たりにして、管理を任せた隣家の誠意のなさに暗澹たる気分が変わる。これは、かつての帰属すべき世界を失った歌人貫之の傷心に重なっている。醍醐天皇や兼輔の在世当時の京が消滅したことの悲哀を表わす。土佐赴任前に貫之は醍醐天皇に『古今集』から秀歌を抜き出して新しい歌集を編むことを命じられていた。『新撰和歌』がそれである。その醍醐天皇は延長八(930)年に薨去し、勅命を伝えた藤原兼輔も承平二(932)年に世を去っている。つまり、京での自分の存在を支える基盤を、貫之は土佐在任中に失ってしまったのである。『新撰和歌』の序文はその辺の事情と心境を次のように記す。

昔延喜之御宇、属世之無為、因人之有慶、令撰進万葉集外、古今和歌一千篇、更降勅命、押其勝矣、伝勅者執金吾藤納言、奉詔者草莽臣紀貫之云々、未及抽選、分憂赴任、政務余景、暫以選定、(中略)貫之秩罷歸日、将以上献之、橋山晚松、愁雲之影已結、湘浜秋竹、悲風之声忽幽、伝勅納言、亦已薨逝、空貯妙

21) 貫之と惟喬親王の関係については、吉山裕樹「『惟喬親王物語』の展開と『土佐日記』—『伊勢物語』紀貫之筆作試論」(『比治山女子短期大学紀要』1982 3)などに詳しい。

22) 前掲書。

辞於箱中、独屑落涙於襟上、若貫之逝去、歌亦散逸、恨使絶艶之草、復混鄙野之篇、故聊記本源、以伝来代云爾<sup>23)</sup>

貫之の土佐からの帰京の旅が、どれほどに悲痛な思いを伴うものであったか、これで明らかであろう。仮名文である『土佐日記』との対置でいえば、むしろ漢文であるこちらのほうにこそ、貫之その人の喪失の思いと悲愁が表われていることが確認される。

千辛万苦のあげく、土佐から帰ってきたが、都はかつての都ではなく、荒廃し、人の心までもが荒れてしまっているのである。そのような現実の前にたたずむ老いた貫之の心中には孤独感が去来したと思われるが、それはもう少し具体的に言えば、自分の政治的な後ろ見の喪失による空虚感でもある。苦難の船旅の最中、慕ってやまなかつた京は、京に着いた瞬間、空洞化してしまうのである。都への執着と、自邸に着いてからの虚しさは、煩惱する貫之の姿をよく反映していると言える。

## 5. 道真の都落ちと文学

貫之の都落ちと文学というテーマで考える上で、道真の場合がよい参考になる。道真の菅原氏と貫之の紀氏には、次のような共通点が認められる。①菅原氏(もともとは土師連、のち宿禰)も紀臣も大化前代から大和朝廷に仕えた、いわゆる古代氏族であること、②八世紀末から九世紀初めの同一時期に外戚となる幸運に恵まれたこと、③十世紀以降他の古代氏族とともに没落の歩みを加速したこと、④道真と貫之に代表される大きな文学的業績を残したこと、などである。道真も貫之も名門家の出身で、家門に対する自矜心を持ち、一時期は栄達の道を行っていたが、藤原氏の勢力に圧倒されるようになり、地方に転出される身となったのである。しかも、二人とも都落ちを経験し、それを文学として営んでいる<sup>24)</sup>。

ところで、道真と貫之は都落ち後、対照的な姿勢を見せている。道真(845～903)は、祖父清公と父是善ともに文章博士を務めた学者の家系に生まれた。幼少より詩歌に才を見せ、十八歳で文章生試に及第し文章生となる。また、文章生定員二十名のうち二名が選ばれる文章得業生となり、正六位下に叙せられる。その後、方略試に合格し、正六位上に叙せられ、従五位下となり、兵部少輔、ついで民部少輔に任ぜられた。そして三十三歳でいよいよ家の職である文章博士に就任し、学者としての最高の栄進を継げる。また、

23) 『新編国歌大観 第二巻 私撰集編』(角川書店 1984)による。

24) 道真と貫之の比較は、例えば目崎徳衛 「文学史の九世紀 菅家四代と紀氏一族」(『国文学』1992 10) や大岡信 「道真と貫之をめぐる間奏的な一章」(『紀貫之』筑摩書房 1989)などに詳述されている。

元慶三(879)年、従五位上に叙せられる<sup>25)</sup>。

ところで、そのように文人儒者の頂点に立った道真が、仁和二(886)年讃岐守に任ぜられる。それは客観的にはともかく道真自身にとっては、左遷にはかならなかった。道真は、讃岐国転出にあたって、式部少輔・文章博士・加賀権守の三官を解かれる。文章道出身の文人官吏としての顯職をすべて解任されたのである。道真は仁和二年、讃岐守に任ぜられ、実質的な左遷を経験させられる。その讃岐において詠じられた詩が『菅家文章』巻三、四に収められているが、この讃岐時代の一五二首の作品は、不本意な地方官を左遷と意識したことから、失意を主な内容とし、寂寥孤愁の心が切々と表現されている。学儒にして詩人である道真にふさわしい要職から、突然の讃岐への転出はかなりの絶望感をおぼえさせたのであろう。例えば、「秋」(『菅家文章』巻三 一九六)の「涯分浮沈更問誰 秋来暗倍客居悲」句には、不如意な生活に満足してよいものなのかと、尋ね問う相手も居ないことを嘆き、絶対絶命の孤独感を表わしている。また、菊花は、宮廷行事の重陽の宴を想起させる花である菊は、落胆し悲嘆に暮れた讃州の生活に自らの心身を癒すすがとして詠じられた。「重陽日府衙小飲」(『菅家文章』巻三 一九七)の「菊遺窺園村老送 黄従任土薬丁分」句では、村の長老から菊を分けてもらい薬園から邪気払い用の茱萸も調達して張ってみた重陽の小宴は、宮中の詩宴にはとても及ばない、と悲しんでいる。道真は、昌泰三(900)年八月十六日、醍醐天皇に菅家三代の家集二十八巻を献上しながら、讃岐守時代を「客意者、以叙微臣之失道」と述べている。学儒官僚で宮廷詩人たることを自負する道真が、讃岐国で如何に悲痛かつ暗澹たる思いで宮廷を離れ旅愁に心晴れず暮していたか、が確認される<sup>26)</sup>。

また、延喜元(901)年正月、右大臣菅原道真は、突然罪を問われて太宰権帥に左遷されて都を追われた。醍醐天皇に対して陰謀(醍醐天皇を退位させ、代わりに彼の娘の夫である天皇の弟齊世親王を立てようとしている)を企んでいる、との罪である。この陰謀説によって、道真は西のはずれの城砦都市で、幽閉者の生活を二年間続けた後、この地で悶々たる思いのうちに死ぬのである。道真がここで書いた詩は、無実の罪に陥られた無念の思いを切々と訴える、まさに血涙をしばった慟哭の詩であったが、それを集めて編纂したのが、『菅家後集』である<sup>27)</sup>。

25) 道真の政治的な面については、大岡信「日本の詩 四つの柱 菅原道真 詩人にして政治家—あるいは日本の詩と漢詩の間に横たわる深淵」(『群像』1994 10)などに詳しい。

26) 道真の讃州時代については、波戸岡旭「讃岐守時代の道真—『讃州の客意は道を失へるを述べたるなり』」(『国学院中国学会報』2000 12)、竹中康彦「讃岐守菅原道真に関する一考察」(『古代中世の社会と国家』1998 12)、瀬川ヒサエ「菅原道真の讃岐守時代岡一男博士頌寿記念論集」(『平安朝文学研究』1971 3)などがあり、拙稿「菅原道真の自然詠—讃岐守時代を中心に」(『日本文化学報』2005 11)もそれに関するものである。

27) 『菅家後集』に関する論文としては、金原理「『菅家後集』と筑紫」(『筑紫古典文学の世界上代・中古』1997 9)、山本登朗「謫居と閑居—太宰府の菅原道真」(『磯』1997 8)、谷口孝介「菅家後集の成立」

延喜元(901)年二月、五十七歳の老齡で二人の子供と弟子を連れて大宰府に着いた道真は、孤独感と絶望感を覚え、それは日が経つにつれ、ますますつのるばかりであった。

|         |                           |
|---------|---------------------------|
| 秋夜      | 九月十五日                     |
| 黄萎顔色白霜頭 | (黄に萎める顔色 白き霜の頭)           |
| 况復千余里外投 | (况復むや千余里の外に投れるをや)         |
| 昔被栄花簪組縛 | (昔は栄花 簪組に縛がれき)            |
| 今為貶謫草萊囚 | (今は貶謫 草萊の囚たり)             |
| 月光似鏡無明罪 | (月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし)   |
| 風氣如刀不破愁 | (風の気は刀の如くなれども 愁へを破ることあらず) |
| 随見随聞皆慘慄 | (見るに随ひ聞くに随ひて みな惨慄)        |
| 此秋独作我身秋 | (此の秋は独り我が身の秋と作り)          |

(『菅家後集』 485)<sup>28)</sup>

流謫して初めて迎えた秋の作品であるが、題の下に「九月十五日」という注記があるごとく、中秋ではない寂しい晩秋の満月を詠じている。

第一・二句においては、元気のない顔色や白髪/head、都から千五百里も隔てている身の上を顧み、絶望と孤独の感を新たにかみしめている。そして、第三・四句では、窮屈な束縛の多かった仕官生活と荒蕪の田舎での謫居生活とに、過去と現在を対比させており、第五・六句では、月と風に自分の無罪を明かし挫折を断ち切ってほしいと、懇意を込めて言ってみるが、何の甲斐もないことを恨む。結局、第七・八句では、天下の秋のさびしさが我が身一人に集中すると悲しむ。荒涼たる配所での生活の中、自分の無実を訴えたいと願うが、愁いは晴れず、秋の愁いが自分の身上に集中し、私だけ悲哀が限りなく深いと歎息している。

秋を悲しい季節とする観念は、もともと中国の漢詩からきたもので、例えば、道真が愛誦した白詩の「暮立」(『白氏文集』巻十四)の第三句・四句に、「大抵四時心総苦就中腸断是秋天」とある。四季がすべて悲しいが、中でも腸を断つように悲しいのは秋であると詠じるのであって、この白詩の句は、『和漢朗詠集』(「秋興」223)にも採録される

(『中古文学』1987 5)などがあり、拙稿「『菅家後集』の自然表現」(『日本学研究』2005 10)もその一つである。

28) 『菅家後集』の本文引用は、岩波書店の大系本である川口久雄『菅家文章 菅家後集』(1966)による。

など、日本でも広く愛された。道真は、そのような漢詩の伝統を受けながらも、左遷という自らの不遇、政治への失望、老いへの歎息などを重ね、より深化した悲哀感を作り上げていると見られる。「悲秋」の観念は、この詩において道真の繊細な感受性によっていっそう純化した形で表わされている。その秋という季節の代表的な景物である「月」と「風」は、左遷への失意をよりひきたてるとともに、作者の孤独と絶望を底知れぬ深いものにしていく。

以上のように、道真は二回の都落ちを経験しながら文学の世界においても大きな転機を迎えるようになるが、それは流謫の生活を余儀なくされた道真の心境を表わす形で表わされた。すなわち、地方への転居や左遷は、道真にして不幸な境遇に対する内面的な苦悩を深くし、道真の詩の世界を抒情詩として一段階高く吊り上げた結果を招いたのである。その面で、任地の土佐での生活における感情を抑えようとする貫之とよい対照をなしていると言えよう。

## 6. おわりに

平安時代、文学の担い手の中で男性は、主に政治をする官人である場合が多く、いわゆる「官人＝知識階層＝文学者」の関係となっていた。それゆえ、文学者自身の政治的な没落は、当然彼の文学世界に多大な影響を及ぼしていた。その政治的な不遇や没落は、大体都落ちの形で実現され、住み慣れた都から遠い地方に赴任させられたのである。文学者自らの挫折や孤独は、文学作品として形作られたが、その様相は、それぞれ異なる。

貫之は、延長八(930)年、六十歳の老齢で土佐守として下る。『万葉集』に「天さかる夷」「遠き土佐路」と歌われた土佐国は、伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐などともに遠流の流刑地であった。貫之と同族の紀夏井が土佐国に流謫される事件もあった。貫之の土佐赴任は、流人としての左遷ではなかったとしても、藤原氏の勢力によって中央から追い出される紀氏の同族意識があったに違いない。貫之は、飛鳥一奈良一平安初期まで多くの人材を出した名門家である紀氏の末裔として、矜持と自負を抱き、都人として約六十年の歳月を送ってきた。それが一日にしてうって変わり、流刑地の土佐国へ下ることになったのである。結局、土佐国在住は、貫之にとって敗北感や挫折感をもたらした孤独の時間だったことが明らかである。

ところで、その土佐守時代を書き綴った『土佐日記』には、貫之の敗北感や挫折感が直接的に語られていない。土佐国に対する不満や孤独感は、帰京の路についてから、新任者や現地の人、船頭などの態度に向けられる形で述べられる。そして、それらの感情は

都への思慕の情を呼び起こすものとして表わされ、否定的な面そのものは稀薄になっている。つまり、土佐国において貫之が味わったであろう悲哀感や孤独感は、『土佐日記』においてそのまま表出されることはなかったのである。その感情を、亡児追慕や都への思慕の思いとしてごまかして表わしている。それは、都の家に着いてからの場面によっても確認される。亡児追慕の念は、癒されることがなく、都への憧れも空洞化してしまう。結局、土佐国を去りながら作者の大きな心情の中心—『土佐日記』の主題—であった亡児追慕や都への思慕の思いは、それ自体意味を持つよりも、何かの感情を隠すための装置として用いられているように思われる。

貫之は、土佐国へ下り守として勤めながら新しい心境—例えば、挫折感、孤独などの世界—を経験したであろう。しかし、貫之はその憂鬱な心境をそのまま表出することは抑制した。代わりに、亡児追慕や都への思慕の思いを描こうと努めた。自分の政治的な不遇を語ることは、できるだけ冷静を保とうとした。現在の状況への不満や批判を直接的に書くのは、当時実勢であった藤原氏に対する不満表出となりかねないし、個人的には人望の無いことになる。そのような面で、亡児追慕は、親としての心情だから、いくら強調してもそれは人々の批難を被ることはない。むしろそれによって貫之の政治的な不遇がもっと切実に浮かび上がる効果があるのである。

藤原氏の権勢に押されて一生政治的には不遇であった貫之は、海の彼方にある土佐の守を務め、やっとの思いで帰京することになった。その土佐守として四年間経験したことやそれに纏わる心情を『土佐日記』として書き綴ったと考えられるが、その方法はいかにも間接的で冷静さを保つものであった。それは、国家の最高権力者の地位まで昇り詰めた後、劇的に失脚し追放の身となって流刑地で無念な死を迎えた道真の場合とは、対照的なものである。『土佐日記』は、貫之の土佐守の経験がある面では最大限に虚構化したもので、そこに日記文学の本領があるのではないと思われる。そして、その裏には政治的な意図—例えば、藤原氏に何とか自分の立場をうまく見せようとする意図—が見え隠れしているように考えられる。

## 【参考文献】

- ・菊地靖彦 『『古今集』以後における貫之』(桜楓社 1980)
- ・村瀬敏夫 『紀貫之伝の研究』(桜楓社 1981)
- ・長谷川政春 『紀貫之論』(有精堂 1984)
- ・藤岡忠美 『紀貫之(王朝の歌人)』(集英社 1985)
- ・村瀬敏夫 『宮廷歌人 紀貫之(日本の作家)』(新典社 1987)
- ・黒坂勝美編輯 『新訂増補国史大系26 延喜式』(吉川弘文館 1937)
- ・竹村義一 『土佐日記の地理的研究—土佐国篇』(笠間書院 1977)
- ・黒坂勝美編輯 『『新訂増補国史大系22 令義解』(吉川弘文館 1939)
- ・新井栄蔵 「王朝官人紀貫之の職務」(『文学』1986 2)
- ・菊地靖彦校注 『土佐日記 蜻蛉日記』(新編日本古典文学全集 小学館 1995)
- ・高野晴代 「土佐日記における舵取りの造型について」(『解釈』1983 11)
- ・吉山裕樹 「『惟喬親王物語』の展開と『土佐日記』—『伊勢物語』紀貫之筆作試論」(『比治山女子短期大学紀要』1982 3)
- ・『新編国歌大観 第二巻 私撰集編』(角川書店 1984)
- ・目崎徳衛 「文学史の九世紀 菅家四代と紀氏一族」(『国文学』1992 10)
- ・大岡信 「道真と貫之をめぐる間奏的な一章」(『紀貫之』筑摩書房 1989)
- ・大岡信 「日本の詩 四つの柱 菅原道真 詩人にして政治家—あるいは日本の詩と漢詩の間に横たわる深淵」(『群像』1994 10)
- ・波戸岡旭 「讃岐守時代の道真—『讃州の客意は道を失へるを述べたるなり』」(『国学院中国学会報』2000 12)
- ・竹中康彦 「讃岐守菅原道真に関する一考察」(『古代中世の社会と国家』1998 12)
- ・瀬川ヒサエ 「菅原道真の讃岐守時代岡一男博士頌寿記念論集」(『平安朝文学研究』1971 3)
- ・鄭順粉 「菅原道真の自然詠—讃岐守時代を中心に」(『日本文化学報』2005 11)
- ・金原理 「『菅家後集』と筑紫」(『筑紫古典文学の世界上代・中古』1997 9)
- ・山本登朗 「謫居と閑居—太宰府の菅原道真」(『磔』1997 8)
- ・谷口孝介 「菅家後集の成立」(『中古文学』1987 5)
- ・鄭順粉 「『菅家後集』の自然表現」(『日本学研究』2005 10)
- ・川口久雄校注 『菅家文草 菅家後集』(日本古典文学大系 岩波書店 1966)

## 要 旨

古代日本は、官人が文学を営むことが多かったため、各々の文学世界は政治の波に大きく左右されていた。国家の最高権力者の地位にまで昇りつめた人も、一日にして失脚し、僻地に追放される身になったりする。都を離れ遠く地方に下る身になってはじめて文人は、まったく新しい人生の局面に立ち向かうようになるが、その断絶した所で暮す孤独な生活は、ある面では文学者としての感性を育ませ、内面的な感情をより深化する契機になる。平安時代の日記文学の嚆矢『土佐日記』も、紀貫之の都落ちから生まれた作品である。本稿では、貫之の都落ちと文学の関係について考察し、『土佐日記』という日記文学開始の裏を探ってみた。

貫之は、土佐国へ下り守として勤めながら挫折・孤独などの新しい心境を経験したであろう。しかし、貫之はその心境をそのまま直接的に表出することは抑制し、自分の政治的な不遇を語ることは、できるだけ冷静を保とうとした。現在の状況への不満や批判を直接的に書くのは、当時実勢であった藤原氏に対する不満表出となりかねないし、個人的には人望の無いことになるからである。そのような面で、『土佐日記』の表面的な主題となっている亡児追懐の念は、親としての心情だから、いくら強調しても人々の批難を被ることはない。むしろそれによって貫之の政治的な不遇がもっと切実に浮かび上がる効果がある。

藤原氏の権勢に押されて一生政治的には不遇であった貫之は、海の彼方にある土佐の守を務め、やっとの思いで帰京することになった。その土佐守として四年間経験したことやそれに纏わる心情を『土佐日記』として書き綴ったと考えられるが、その方法はいかにも間接的で冷静さを保つものであった。それは、国家の最高権力者の地位まで昇り詰めた後、劇的に失脚し、追放の身となって流刑地で無念な死を迎えた道真の場合とは、対照的なものである。『土佐日記』は、貫之の土佐守の経験がある面では最大限に虚構化したもので、そこに日記文学の本領があると思われる。そして、その裏には政治的な意図—例えば、藤原氏に何とか自分の立場をうまく見せようとする意図—が見え隠れしているように考えられる。

キーワード：貫之、都落ち、日記文学、土佐、都、道真、政治的、孤独、挫折、不満

투 고 : 2007. 5. 31  
1차 심사 : 2007. 6. 9  
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (302-735) 대전시서구도마2동439-6 배재대학교 일본학과  
電 話 : 042-520-5363  
e-mail : sunbun@pcu.ac.kr